1　新しい古いうち

青いオート三輪が野道を走る。

五月に五月と五月をのせて

父さんは、メガネをかけ、白いシャッポをあみだにかぶって、たのしげにうたう。

ゆくぞわれらは
自由の森へ

すると、父さんのとなりの運転席にずっしり腰かけて、ハンドルを両手に握った藤山のおじちゃんが、前方を無表情にながめながら、ボソリと合いの手を入れた。

わっしょい

サッキは、かがやくような陽気な顔を、オート三輪の荷台のほうからつき出し、
「お父さん、キャラメル、藤山さんのと！」
「おっ、すまんな」
オート三輪はトタトタトタタと軽快に、大空の下、地平線まで緑の麦の穂でおおわれた大地を走っている。
トタタ、トタタタ、タタ、タ。ガッタ、ブルルン、ドフドフ、バッタン、ギュッ、ドタタタタ。
しっかり口をしめていないと、キャラメルが口から飛びだしてしまいそうだ。
「おじ、ふ、ふじ、藤山さーんっ」
「おーっ」
「あと、ど。ど。やだ、ゆ、ゆれる。ははは っ」
「いなか道だからな」
「あと、どれっ、くら、らい？」
ははっと、父さんも笑った。

「つかまってなさい、落ちるぞ」
「へっちゃら！」
「松之郷のバス停まで十五分てとこかな」
父さんは、腕時計のネジを巻きながら、
「そうだな、新しい家まで二十分だ」
「ばんざーいっ」
サツキは、荷台の大荷物の下にいる妹のところに、またもどった。父さんと藤山のおじちゃんは、またうたいだした。

五月に（父さん）
わっしょい（藤山のおじちゃん）

このふたりは、高校時代からの考古学仲間で、とても仲がいい。発掘調査もさそいあってするし、学術論文を連名で書いたこともある。どっちかの家族に心配ごとができると、心配ごとのない人のほうが助ける。
一年前にサツキとメイの母さんが倒れて、七国山の結核療養所の女子寮に入院したときも、藤山のおじちゃんが母さんを病院まで連れていってくれた。
引っ越しは、心配ごとじゃなく、とてもうれしいことだ。

母さんがよくなって、自宅で病気を治すことになり、それで病院のそばの松之郷に引っ越すのだ。だから、今日はうれしくてうれしくてしようがない日なのだけれど、こういうときにも、やっぱり藤山のおじちゃんは、きまったことみたいに来てくれる。
でも、歌は、いっしょに合唱っていうわけにはいかないみたい。藤山さんは、わっしょい、しかうたわない。オンチなんだって、すごい。
時は五月、夏の気配のする土曜日の朝。
なんて青くて広い広い空なんだろう！
道は、なんてまあ、デコボコと、どこまでもどこまでも続いているのだろう！
太陽は、麦の穂波をキラキラと緑にかがやかせる！　爆音をけたてて前進する荷物だらけのオート三輪に吹く風！

五月と
わっしょい

サツキの名まえは、漢字で書くと五月だ。

五月をつれて
わっしょい

サツキの妹の四歳になるメイにも、父さんはまた、五月という名まえをつけた。メイは、英語の五月。

だから、歌のとおり、父さんは、五月に五月と五月をつれて、引っ越すのである。

ゆくぞわれらは
自由の森へ

「わっしょい！」

と、メイが一心不乱にキャラメルの紙をむこうとしながら、いった。メイはとっても小さかったから、父さんの勉強机の下にすっぽりはまりこんで、オート三輪がタテにゆれようがヨコにゆれようが、平気だった。サツキが用心して、メイのまわりに座ぶとんをつめたので、居心地もよさそうだった。

「メイ、やったげる。かして、キャラメル」

「いい」

「メイじゃできないわよ」

「いい」

「手がブルブルしちゃってるじゃない」

「いい」

それからメイは、ゆっくり、

「これで、いい」

といって、紙がビリビリとこびりついているキャラメルを、食べてしまった。

「よくないじゃない、ちっとも」

「いいの。おいしいんだから」

細い、栄養失調みたいなからだのメイは、ひらひらとうすい髪の毛を耳の両わきでむすんで、あたまばっかりが目立つ。

メイの考え深そうな目は、サツキのように大きくはない。鼻は丸いし、歯は少しみそっ歯で、サツキのように白くきれいに並んではいない。

でもメイは、不思議にかわいかった。ギュッとくちびるの両はじをつり上げて笑うと、赤いほっぺたがとんがって、黒いキラキラした目がじーっとこっちをながめる。

「きれいにむいてあげたのに」

「いい、のっ」

ふたりだけの姉妹で、母さんが一年前から入院中。姉さんは七つも年が上で、本はたくさん読むし、足も学校中で一番速い。けんかだって近所のどの子よりも強いんじゃないかというあの草壁サツキちゃん。

「キャマメルぐらい、ひとりでむく。メイはもう、おねーさんなんだから」

そんな姉さんをもてばだれだって、たとえ四歳にしかならなくても、こういう人になる。
「うわっ、やだ。メイ。かくれて！　あたまだしちゃだめっ！」
急にサツキにどなられて、メイはドッキリ、机の下で首をちぢめ、
「どうしたの、どうしたの？」
「おまわりさんっ」
おまわりさん!?
メイは、ギュウッと目をつぶってしまった。
ガタンガタン、トタ、トタタタタ。
「おねえちゃん――」
がまんができず、ひそひそきくと、
「しいってば!!」
「つかまったら、ろうや、なの？」
「だまって！」
ガタタタガタタタ、トタタタタ。
オート三輪はのんきな音をたて、スピードをぜんぜん落とさずに走り続ける。
かみさま。お父さん。お母さん。おねえちゃん。おたすけ。メイはろうや、はいりたくないです。
「なんだあ！　びっくりしちゃったあ！」

サツキが急に荷台から頭を出し、外にのり出して手をふったので、今度はメイがびっくり、
「だめ、おねえちゃん」
「ほら、メイ、見て。おまわりさんじゃなかった、郵便屋さん」
郵便配達のおじさんが手をふり返してくれたことは、安心したサツキとメイをバアッとはればれした気分にした。二人は、机の下でわざわざボカンボカンとゆれたり飛び上がったりした。
「おはかだ。おはかがうまってた」
メイがさけぶ。
「どこどこ？　あ、メイ、見てごらん。大きいカラス！」
「おねえちゃん、おまわりさんてさあ？」
メイが、サツキに、たどたどしくたずねた。
「うん」
「おまわりさんだったらさあ、ろうや、だった、あたしたち？」
「わかんない。罰金ぐらいじゃない」
荷物だけでも、こんなに積みこめば罰金よ、と父さんが郷子伯母さんにいわれていたが、本当にこの青いオート三輪は、引っ越し荷物でぱんぱんにふくらんでいる。
「なんにもないから簡単だ」
父さんは、貧乏人の引っ越しさと気楽なことをいっていたが――たんすにふとん袋、父さ

んの勉強机に椅子、食器戸棚に丸いちゃぶ台、自転車がくくりつけてあって、大きな長椅子があって、鍋もお釜も米櫃もやかんもかさもたらいも洗濯板もある。何百冊もの本や資料や、考古学上の仕事道具をべつにして、である。遺跡から掘り出してきた土器だとか石の破片だとかを、父さんが講師をしている大学院の研究室に一時あずかってもらっても、である。しかもそのうえに、ヒトがのっちゃいけない荷台の中に、ふたりの子どもだ。

「ま、よかろう」

なにが、まあいいのかよくわからないが、父さんと藤山のおじちゃんはふたりして、「ま、よかろう」「ま、よかろう」を連発しながら、朝早く、草壁家の荷物という荷物をありったけ青いオート三輪の上に積んでしまった。

それは、すごいながめだった。

「なんと、はじけたザクロのようだ」

母さんの実家の、寺島のおばあちゃんが、ヒモをかけ終わった小さなオート三輪を見て、パチンと両手を合わせて、そうつぶやいた。

黒板塀から八重桜の木が見える、都心ちかくの大きな寺島の家。この家の二階でサツキは十年、メイは四年くらし、こんどは家族だけでくらすために松之郷へ引っ越すのだ。

サツキとメイが、トラックの荷台にのって行きたいと父さんにせがんだとき、

「ま、よかろう。のっけちまえ。いいよ」

藤山のおじちゃんは、そういってくれた。

「運転席はせまいしな」

「まっ、よかろう」

寺島の家の伯母さんは、ずけずけモノをいうたちの人だったが、心配もあって、このときもガミガミ。

「あなたって人は、子どもを荷台に入れたりして！　見つかったら警察に行かなきゃなんないわよ。そうしたら罰金とられるのよ！　いーい？　あんたたち、外なんか、うかうか見てちゃだめよ。牢屋に入りたくなかったら、ちゃんとかくれてなさいよ、いーい？」

伯母さんが、「あたしがおくっていくから、電車で行きなさい」といいだすのではないか、サツキはハラハラして、しまいにはドッキンドッキンと心臓がなりだしたくらいだったが、それはだいじょうぶだった。

サツキとメイの父さんは、「発掘調査」をしたり、「学術論文」を書いたり、サツキのことばでいえば「漢字みたいな仕事」をする人であったが、

「ま、ぼちぼち」

そんなふうに、おとなしく寺島の伯母さんにこたえながら、けっきょくはふたりを、「ま、ぼちぼち」「ま、よかろう」で、トラックの荷台にちゃんと乗せてしまったのである。

ガタガタガタガタガタガタ。

トタタ、トタタタ。

トタタタタタタタ。

「あなたが、あんまりのんきだから、靖子が肺病なんかになるんだわよ」
母さんが入院したあと、父さんにそういっていた伯母さん。
そうじゃないよーだ。お父さんは、やさしくていい人なんだもん。お母さんが結核になったのは、結核菌がお母さんについちゃったからで、お父さんのせいじゃない。おばさんなんか、サツキはきらいだよーだ。
サツキは、トラックのうしろの、はるか彼方の空の下にいるにちがいない伯母さんにむかって、すごいアッカンベエをした。
アッカンベエをすませると、サツキははっはっはっとごうけつ笑いをした。
「ヤッホー、ヤッホー、大きな木、きれいなきれいな木！」
青いオート三輪のゆれること！　荷台の中から見る景色は、なんでもピカピカにみがいたように見えた。きれいなものも、きたないものも、おもしろいものも、おもしろくなさそうなものも、みんなおもしろかった！
「お姉ちゃん、お店屋さんがあったよ」
「見た、ボロだったねえ!?」
「うーん、ねえ!?」
オート三輪は土ぼこりをあげて、梅林のつづく街道をすぎ、「つるや」と看板の出ている、掘立小屋のような村の雑貨屋の前でバスとすれちがった。
トタタ、トタタタ。

「ここがバスの停留所、もうすぐ家だ」
父さんが、オート三輪の荷台の横をドンドンとたたいて、サツキに教えてくれた。
「いなりまえ？　いなりまえっていう停留所だった？」
稲荷をいなりと読むのだっけと、ちょっと自信がなくて、サツキがきくと、
「稲荷前だよ。かわいいお稲荷さんがあるんだ、ここに」
かわいいお稲荷さん。
そんなものがあるとは信じられないような場所だった。
はげっちょろけの赤い鳥居。灰色と茶色の雨のしみでみるかげもないのぼり。百年も前からそこにあるみたいな、ゴミだらけのクモの巣。
トタタ、トタタタと、オート三輪は、あぶなっかしく大荷物ごとかしぎながら、停留所のわきを曲がっていく。
サツキとメイは、たちまち、行く先のことしか考えなくなった。
オート三輪が何回もバウンドしたあと、木立ちにおおわれた暗い道をぬけだし、ひろびろと明るい平野へ飛びだしたからだ。
「サツキ、メイ、ついたぞ」
父さんがさけぶ。
「松之郷。いいところだと思わないかい!?」
「わあっ……」

サツキがいった。
「わあっ……」
メイもいった。
サツキとメイは、そのあと、ずーっとなんにもいわなかった。ふたりは、おどろいたような、ちょっとはずかしそうな目で、オート三輪の上から松之郷を見つめていた。
かがやく白い白い雲の下、むらさきがかった青い空をはすかいに横切って、小鳥がチーチク、どこかへ飛んでゆく。
はなやかに白くゆれる梨の花の畑。見わたすかぎり水田の、そのずっとずっとむこうに、いくつかの平地林。
あぜ道の緑の草の中に、お日さまのようにひろがるタンポポの花。すみきった空気の中をわさわさと通る風。ときどききこえてくる牛の鳴き声。トタタトタタとオート三輪。
いいところだと思わないかと、父さんはたずねたが、サツキもメイも、ここがいいところかどうかはまだわからなかった。
「だれもいないね？」
メイがサツキにいった。
「いるよ。ほら、あっち。田んぼ。馬も」
「だって。あれ、子どもじゃないもん」
「そうだね」

学校だとか家だとか、いろいろ見てからでなきゃ、きめられないなと、サツキは思った。
「ほんとに子ども、いないね」
「学校、じゃなあい？」
メイがたどたどしくきく。
「そうね、学校いってるのよ、みんな」
おかしなことに、サツキがメイにそういったとたんに、オート三輪が、サツキと同じぐらいの年かっこうの男の子の前で急停車した。
あとできいたことだが、それは、サツキたちの父さんがこんど借りた家の管理をしている農家の子で、大垣勘太という名の四年生だった。
父が大垣家にあいさつをすませると、オート三輪は、またガタタンガタタンと、あぜ道よりはましという程度の石ころ道を、今度はゆっくり走りはじめた。
「お父さん」
「なんだっ？」
「もうすぐそこ？」
「ああ、もうすぐだよ」
「あと何分？」
「二、三分」
サツキがふり返って見ると、男の子は自分の家の土手の上から、まだこっちを見ている。

サッキは、また荷台から前にのりだして、助手席の父さんに、
「お父さん」
「なんだ」
「あの男の子、四年生ぐらい？」
「知らん」
「四年生なら、あたしといっしょね」
「そうだな」
「お父さん。あの子、こんにちはもいわなかったね？」
「はずかしかったんじゃないか？」
「ふうん。なぜ土曜日なのに学校にいってないんだろう？」
藤山のおじちゃんが、正面をみつめたままでサッキに大声でいった。
「今時分だと、田植え休みなんだよ、ここらへんの学校は」
「田植え休み？　そんなお休みがあるの!?」
「ちょっとの間だけどね。もうけたろ」
父さんはサッキにそういって笑った。
それから、愉快そうにどなった。
「よーし、着いたぞ！」

石だたみのなだらかな小さな橋の下は、小川だ。サッキは信じられないという声で、
「この川も、あたしたちの家の川？」
「まあ、そう思ってかまわんよ」
「お魚も!?」
小川の橋を渡りきったところに、石の門があった。その門のところから、土手の土を深くえぐってつくった切り通しの細い道が、上のほうへと登っていく。
「いこう、メイ！」
サッキは、切り通しの上にのびのびとおおいかぶさった木の枝の美しい緑の天井の下を走った。上へ、上へ。
切り通しを登りきった場所に、家があると父さんがいったからだ。
家はサッキの前に、うかぶように、あとずさりするように、かなしむように、あらわれた……。
それは、夏のはじめの荒々しく若い雑草の上にたよりなくうかぶ、古い古い船のような家だった。
「ボロだあ……」
いつのまにかサッキに追いついたメイが、びっくりした声をはりあげていった。
「ボロだねえ」
ボーロボロ、だ、この家、まるで「お化け屋敷」だ。

「ボロボロだねぇ」「本当にボロボロだねぇ、これじゃあオンボロだよ」
おかしなことに、ボロだボロだという音のひびきが、ふたりのお腹の皮をくすぐる。笑わせて、とほうもなく陽気にするのだ。
「あたし、この家、気に入ったと」
「メイも、この家、気に入ったと」
ボロだ、ボロだ。茶色の板壁は雨や風で灰色だ。ボロだ、ボロボロ、赤いブリキの屋根はさびて茶色だ。うわあ、まったくもってボロ。しめっきりの雨戸、ほこりだらけのすりガラス。
家は、そばによればよるほど、ヨレヨレに、ボロボロに見えた。
「あら、これもオンボロ。メイ、見てごらん。ほら、ほらほら！　グラリグラリッ、グッグッ」
なんだかふざけたくてたまらないサツキは、「おもしろーい、おもしろーい」と、笑いながら南側の庭にやってきて藤棚を見つけた。
藤棚はもうくさっていて、虫くいだらけの根元がサツキにゆすられると、メリメリ音をたててきしみはじめた。
「やだ、これ。ペンキがおっこってくる！」
「サツキねえちゃん、これ、グラリグラリ。これ、グラリ。これ、もしかして、こわれるんじゃ、ないっ？」
なんでもサツキのまねをしたがるメイが、小さな手でまっかになって柱をおした。

ふたりの頭の上に、ペンキだけではなくて木のクズがパラパラと降りそそいだ。
きゃーっ。ば、ははは、げ、ははは。
ふたりはばか笑いをしながら、逃げだし、今度は庭を探検しはじめた。
この庭もまた――長いあいだ放っておかれたせいなのだろう――よく手入れされた庭とはまるでちがっていた。
ケイケイケイケイと、どこかでカエルが鳴いている。
庭のすみの、大きな石にかこまれた池のあと。ふく風にゆれる雑草の中に、ポツンと咲く紫のアヤメの花。毒々しく赤い百日草。にげていくしじみ蝶。
「ここって、お化けがのんびり遊べそうなとこね」
サツキはそういって、草の上ででんぐり返しをした。
「メイ、見てごらん！　すごい木！」
家の東がわの森の、こんもり木がかたまり盛りあがっているそのまた上に、黒ずんだ巨大な木がそびえている。
風に、翼のような大枝をぐりぐりと動かして、まるで――化けもののように見える木。
「大きいんだねぇ」
サツキが感心したようにいうと、
「ハア……」
メイが、へんな声をだして、

「クシャンッ」
空が青くて青くて、見上げているうちに鼻がかゆくなったのだ。
サツキとメイが木を見て、つっ立っていると、家の中から父さんが雨戸をあけはじめた。
「お父さーん、見てよ。お化けみたいな木があるの！」
「ああ。塚森の大クスだろ」
「つかもり？」
「ああ。家のとなりの森をね、そういうんだ」
「あの木、クスノキ？」
「そうだよ」
「すごい木ねえ、お父さん」
「三十メートルはあるんじゃないかな」
「お化けみたいだもんねえ？」
「そうだな。まあ化けものの一種だな。何百年も生きてきた木だからね」
ク・ス・ノ・キ。
メイが口の中でいった。ク・ス・ノ・キ。ク・ス・ノ・キ。
サツキは木のほうをむいて、おじぎをした。それから手をきちんと合わせてたのんだ。
「クスノキさん、こんにちは。わたしは、ここの家にひっこしてきた草壁サツキです。四年生で、元気なかわいいよい子です。どうぞ、なかよくしてください」

サツキとメイは、雨戸をあけつづけている父さんのほうへと走っていった。
廊下に体を半分のっけて、運動靴をはいたままはじめてみる家の中をのぞきこむ。雨戸が一枚あくたびに明るくなっていく、カビくさい部屋。

「ん……!?」
「どうしたの？」
「うん、なんか、光った」
こらこら、靴をはいたままでなんだと、父さんがしかる。
「でも、ちょっと。だって、すぐ」
サツキはわけのわからないことを口の中でいいながら、たたたっとヒザで歩いて、座敷の中へ進み、
「あった！」
「なあに？」
「……ドングリだった」
「わあ、わあ、いいな」
緑色に光るかわいい丸いドングリを、サツキは座敷の床の間のちかくでもう一つ見つけた。
「五月に緑のドングリ？　変だな。今時分のドングリは茶色のはずだよ」
父さんはそういいかけたが、
「おーい、草壁。これは、どこに置けばいいのかな？」

「すまん、すまん。とりあえずここに入れてくれ。今、家中の雨戸をあけるから」
重たい電蓄を両手でかかえた藤山のおじちゃんに庭からよばれて、むこうに行ってしまった。
メイがサツキのスカートをひっぱる。
「なあに、どうしたの？」
メイは小さなカサブタだらけの細い手を二つかさねて、サツキの目のところまで持ち上げて見せた。
「メイも、ドングリ、ある」
サツキ、と父さんがよんだ。
「うらの勝手口を、このカギで開けてくれ」
「はーい」
「メイもいく」
メイは歩きながら、とくいそうに自分のひろったドングリは上からふってきたといった。
メイのドングリもかわいい緑色だ。ピカピカの緑だ。
「上って、天井？」
「うん」
「おかしいよ、そんなの。この家、だれもいないはずだもん」
「でも、ポンポーンッて」
「お父さんじゃないよね？」

「ちがう。お父さん、庭にいたもん」
明るい日ざしの中を、草をふみふみ、ふたりで家の裏手にまわる。
だれが、サツキとメイに緑のドングリをくれたのだろう？
父さんは、五月のドングリは茶色いはずだと不思議そうにした。サツキはぎゅっとにぎった手をひらいて、今も緑にかがやくドングリをながめた。
この家には、なにかすんでいるんだろうか？
ネズミとかリスとか……そうじゃなければ、もしかしてお化け？　まさか。
でもそういえば、さっきからだれかが見ている、見はっている、あたしたちの様子をながめている。そんな気がしてならないのも本当だ。
家の壁が、だまって見ている？　空に目玉があって見ている？　塚森の大クスが？　湯気をたてているみたいなハッカや、ススキや、どろぼう草が？
見てるの、あたしたちふたりのことを？
サツキはクスクスッとわらって、
「おげんきですか？」
ためしに家の壁板をトントンとたたいた。
壁は返事をしない。
あたりまえのことだ。
太陽の光が、空からサツキとメイをかかえこむ。がらんとした空。

遠くの田に、東電鉄の電車の音がこだましている。

そのとき、めずらしく、メイがサツキと手をつないだ。メイはサツキにたずねた。

「お化けがいたら、どうする？」

こわがっているのかなと思ったら、おもしろそうに笑ってる。

サツキはメイとつないだ手をはなし、勝手口のカギをガチャガチャまわしながらいった。

「なにしてんですかって、きいてみる」

なに、してんですか、などと——きいてみるヒマは、まるでなかった！

サツキが台所の戸を開けたとたんに、台所全体が、モゾリモゾリゾワゾワーッとゆれはじめたのだ。

台所は、ケシズミよりももっと黒い、フワフワモゾモゾうごきまわるなにかでいっぱいだった。

急に暗いところに入ったせいで、なにがなんだかよく見えないでいるサツキの前で、台所中がもりあがったりくねったりしている。そして、たちまちのうちに——仰天しているサツキを残して、まっ黒だった台所は、なんのへんてつもない、灰色のわびしい場所に変わってしまった。アッと思うまに、たしかに台所から、なにかの影が、あるいはちりみたいなものが、あるいは虫の大群が、どこかに逃げこんだのだった。なんにもない殺風景な台所は、今はもう清潔といっていいぐらいだ。

サツキはガラーンとした台所をぽかんとながめ、それからメイのほうを見た。

メイは、すごい目をしている。

目がゆがんで、まばたきができないでいる。だから、メイもやっぱり、あれを見たのだ。あの、ゾワゾワと、クネクネと、もがきまわるまっ黒なにかを見たのだ。

メイったら目と鼻がひろがっちゃってる。

サツキはメイの顔を見て、おかしくなり、クスリクスリとわらいはじめた。ひろがりっぱなしの小さなメイの鼻をぎゅっとつまんで、

「なにしてんですか、あなた？」

「お化けだ」

メイは、サツキの手をふりはらいながら、

「このうち、お化けがいる！」

「あれ？　虫かなんかかもしれないじゃない」

「ちがう。あれはお化け」

とメイはいう。

「ねえ、お姉ちゃん、あれ、つかまえてもいいんだよね？」

「いいんじゃない……。家のだもん」

なんだかわからないんじゃ、気味がわるいし、とサツキは思った。ようし！

「よし、おねえちゃんがつかまえてやる！　一、二、三だよ、メイ？　ギャアッて、でっきるだけ大きな声、だすのね、わかった？」

ふたりは、わあわあ、ぎゃあぎゃあ、さけびながら台所に突進した。あっちをあけ、こっちをあけ、台所のとなりの風呂場の五右衛門風呂の中までさがした。

すのこの下も、かまどの中も、井戸のポンプの中もさがした。

どこにもいない。

ぜったいに一匹もいない。

あのへんな黒いふわふわしたものは今はもう影もかたちもなかった。

さがしてもさがしても、北をむいた板の間はシンとして空っぽなだけだ。

「おかしいな……」

どこに消えたのだろう？

それとも、見たと思ったのが、まちがいだったのだろうか？

「お化けさん、お化けさん」

メイが、さがしながら、いっている。

「おねがいです。一匹でいいんです。いてください」

「ススワタリだ、そりゃ」

サツキとメイが玄関のほうにまわって、台所のできごとを父さんに話していると、茶の間から、こまったような声が、そういった。

「ススワタリ？」

サツキが思わずそっちを見ると、

「あわくってにげちまったんだろ？」

「大垣さんのおばあちゃんだよ、この家の世話を引き受けておられる」

父さんがいった。

こんにちは、とサツキがあいさつをしに行くと、やさしそうな小さなばあちゃんが、まるで昔からそういうものだといわんばかり、サツキたちの家のものを出したり片づけたりしていた。

「こんにちは、草壁サツキです」

「こんにちは」

ばあちゃんはうれしそうに、あねさんかむりにした手拭いをあたまからとって、ガサガサした手でゆっくりとたたんだ。

「先生、こんなかわいい、きれいな嬢ちゃんがふたりも。ま、ほんとにいいお子持ちだねえ」

おだやかな感じのする大垣のばあちゃんを、サツキはすぐに好きになった。

ばあちゃんはサツキに、

「ススワタリのことなら、放っとくがいいだ。あれらは悪さはしねいし」

といった。

「悪かったよ。リュウマチが出て思うように動けないものだから、ろくすっぽ掃除もせずに、今日の引っ越しをむかえてしまって、申しわけないことした。ススワタリにとっちゃ、はびこりがいがあったろうが、あれがいちゃ、ここはほんとの化けもの屋敷だ、ぼろ家だから」

「いやいや、もっとホコリだらけかと思ってきましたから。きれいなもんでしたよ」
父さんはススワタリのことなんか気にもとめず、食器戸棚を茶の間におろすと、またいそがしく、オート三輪のほうにいってしまった。
大垣のばあちゃんは、台所の井戸のポンプをこいで、バケツに水を入れ、茶の間に運んだ。
ばあちゃんは、せっせとからだをつかいながら、ふたりの子どもを見た。
「肺病の奥さんのお子というから、青白い弱々しい子どもがくるのだろうと思っていたけれど、おもしろいぐれえ元気だし、利口そうだし、よかったよ」
この家は、もともとが、結核を治すために建てられた、病人用の別荘だった。
ばあちゃんが娘のころ女中をしていたお屋敷の奥さまが肺結核で、それで、この家は建てられた。
結核療養所として名高い七国山病院に近いせいもあったし、なによりも奥さまのお気に入りだった、性質のあたたかいよく働くばあちゃんの嫁入り先がこの松之郷だったからである。
サツキたちの父さんが大垣家をたずねて、家を借してほしいと頼んだとき、ばあちゃんはこの家で亡くなった奥さまのことを思い出して、あんまりいい顔をしなかった。
「また肺病か。治ってくれればいいが」と、どうも乗り気になれなかった。
それに二十年ちかくも人が住まないままであった別荘は、塚森のかげにうずくまって、ひどく陰気にみえた。学校通いの子どもたちに、お化け屋敷とよびならわされてもしかたがないほど、弱々しく、さびしくみえる家だった。
「あの、おばあちゃん、ススワタリって」
サツキがおばあちゃんのそばに、ききにきた。

「こんなの？」
両手の指で直径三センチぐらいのマルをつくっている。
「まるくてゴミみたい？　毛虫のゴミみたいなもの？」
ばあちゃんは、どっこらしょと立ちながら、両手で七輪をもちあげる。
「あ、あたしが持ちます」
サツキが七輪を持つと、ばあちゃんは、それじゃといって、お釜と五徳を持った。
「んだな」
ばあちゃんは、考え考えいう。
「逃げ足がはやいやつだろ？　ばあちゃんも目玉つきあわせて、あいさつしたわけじゃないからね」
「ゾワゾワゾワーッて、にげる？」
「あい」
「すごくはやく？」
「まるでB29だいね」
「とべるの？」
「とぶんだよ、あい、見なかったかいや？」

ばあちゃんは、話しながら、台所と茶の間をいったりきたりした。
サツキもばあちゃんにくっついて、鍋にしゃもじやおたまや菜ばしを入れ、行ったりきたりして運んだ。
メイも、ばあちゃんにくっついて歩くサツキにくっついて、片手で親指をしゃぶり、片手でサツキのスカートにつかまり、やっぱりいったりきたりした。口はきかなかった。
メイは、ばあちゃんのいなかふうのなれなれしさがうれしくないのだ。
このばあちゃんはシワクチャだし、まっくろだし、目のへんなところにホクロがあるし。大垣のばあちゃんは、今までメイをかわいがってくれた寺島の上品なおばあちゃんとは、どこもかしこもちがっていた。
メイは、サツキにぎゅうぎゅうからだをおしつけた。メイは、ばあちゃんがこわかった。
「もくもくふえるんだ、ススワタリっちゃ、いくらでも、家が古けりゃ古いだけ」
ばあちゃんは、かまわないのが慣れさせるのに一番とメイのほうを見ないようにしていた。
「オンボロが好きなの？」
サツキがたずねる。
「オンボロと、人がいないとこだなあ」
「お化け？　ススワタリって？」
「まあ、化けもんだ」
「つかまえた人、いる？」
「どうかな」
「おばあちゃん、ススワタリ、見たことあるんでしょ？」
「あい」
「知ってるんだものね、いつ？」
「サツキちゃんのスカートのうしろにいる、だれかさんぐらいのときだ」
「どこで、どこで？　この家で？」
「ほっほ」
ばあちゃんは、泥がつまったような、ひびだらけの手を上げて、ガサガサの白髪あたまをかいた。
「そんなころにゃ、ここはまだ塚森のつづきのやぶと林だよ。やぶ蚊だらけで、ススワタリどこじゃなかったよ」
「じゃ、どこで見たの？」
がまんしきれなくなって、しゃぶっていた親指を口から出したメイがきいた。
「あたしのばあちゃんのばあちゃんの、そのまたばあちゃんの家でだよ」
ばあちゃんは、かわいらしいなあとメイを見て、にこにこした。
それで、口をきくかと思えば、メイはまた指をしゃぶって、サツキのスカートにつかまってしまった。